箱庭制作過程と箱庭作品に関する一考察

～オーストラリアにおけるある女子大学生との箱庭制作体験から～

秦　　真理子*
Tian　P.　Oei**

Ⅰ．はじめに

筆者は，近年オーストラリア，ブリスベン市のクイーンズランド大学心理学部において，箱庭制作に関する調査を行う機会を得，その調査の一部として，ある女子大学生と数回に渡って継続して箱庭を制作した。彼女と箱庭を作っていく中で，箱庭を作るという行為について考えさせられたことがあったのでここにその制作の過程を報告し，考察したい。

1．箱庭制作過程という概念

心理療法の過程において，箱庭という素材がとりあげられ，表現媒体として使用されるとき，その箱庭は表現するに至った過程や，その後のクライエントの言葉や身ぶり等も含め合わせ，全体の流れの中で受け取られる必要があろう。しかし，完全に切り離されることはないとはいえ，「箱庭療法」として取り上げられる，いわゆる「箱庭」を制作すること自体の治療的意義については，これまでに様々な角度から，説明が試みられている。

この，箱庭を制作していく行為過程そのものを，以後箱庭制作過程，と呼ぶ。これは，いわゆる箱庭療法過程とは異なると筆者は考えている。つまり，箱庭療法過程といった場合，従来事例研究の対象として扱われる事の多かった，箱庭の作品の系列に基づく治療の展開（これに関しては，野副（1997)などが実証的方法を介しての研究を行っている。）を指す事が多い。しかし，実際の治療場面では，箱庭制作を巡って，治療者として，箱庭の制作過程や作られた箱庭作品，そしてそれについて語られた言葉をどのように理解し，それとどのように付き合っていくか，というよりミクロな視点が，非常に重要な位置を占めるものである。箱庭療法において，作られたものについての一般的な理解や，流れの中での理解と同時に，今，ここで展開する制作の過程について把握，考察していく事は必須であるといえよう。

---

* 京都大学大学院教育学研究科臨床教育学専攻博士後期課程３回生
** Professor, the school of psychology, The University of Queensland, Australia

2．今回の箱庭制作をめぐって

さて，今回調査を行ったオーストラリアは，1788年に国家とされ，一つの大陸からなるが，先住民族アボリジニ(人口の約1%)と，諸国からの移民(ヨーロッパ系が全体の96%を占める。イギリス連邦の一つとされることから,イギリスとはとくに関係が深い)から構成される，多民族国家である。今回調査を行ったブリスベン市は，オーストラリア大陸の西海岸に位置し，オーストラリアでは3番目に人口の多い都市である。

オーストラリアにおける箱庭療法に関する調査は，岡田他(1988)，櫻井 (1986)，岡田(1991)等がすでに行ってきているが,その目的としては,日本国内を中心として日本での調査対象から，さらに範囲を広げることで，箱庭療法に関してより国際的な視野で基礎的資料を獲得していくこと，また，多民族国家という背景を持った個人の箱庭と，日本というほぼ単一民族から構成されている国家の背景を持った個人の箱庭を比較していくことで，文化的背景の異なる個人の箱庭の相違点と共通性(これを岡田らは,普遍的無意識との関連で論じている)を探るということがある。また，岡田は，先住民族アボリジニの文化に対する興味も述べている。

今回の調査をしていく中でも,日本で箱庭を収集する際との違いが見えることもあり,表現の文化差を考慮させられる点ももちろんあった。しかし,今回の報告では，このような文化差を背景としながらも，制作者個人にとって，筆者という異文化から現れた者に対し，箱庭を使って表現することがどのような意味を持ち得たかを考察していく。その中で，彼女個人に特徴的な箱庭の制作過程に思いをはせてみたいと考えている。すなわち，玩具を箱庭という土台に定位してみるとは，また，箱庭を作品として作り上げていくことの意味，それを言葉にして説明すること，また作り上げるまでの過程について一制作者の過程を振り返る中で考察してみたい。

Ⅱ．箱庭制作に至る経緯と箱庭制作の過程

1．制作者の募集

1997年夏，オーストラリア，クイーンズランド大学内，心理学部の掲示板にて一定の期間連続して箱庭制作をしてもらう学生の募集を行った。クイーンズランド大学では，心理学を学ぼうとする学生は，1回生時に大学院生などが行う心理学に関する実験の被験者になる事が授業の一環として義務付けられている。筆者の試みもその一部となったわけである。筆者の滞在期間と，与える事の出来る単位数の都合によって制作は週に一回1時間のペースで連続6回に当初設定された。募集時には，簡単に箱庭療法について説明(砂と玩具を使って想像的に遊ぶ療法である事)をし，時間と単位数などの設定を記した。

今回，数回に渡って連続して箱庭制作を行うことの意義としては，連続した制作の中で体験されることを検討する中で，より治療場面に近い過程が検討できること，また，個人内での位相の変化が捉えられることが挙げられる。

2．箱庭制作者について

上記のようにして募集した制作者の中の一人が本稿で紹介する女子学生である。まず最初に，彼女に簡単なプロフィールと，箱庭制作に参加した動機について質問用紙に記入する形で答えてもらった。また，その後，分からない箇所については，筆者から質問を行った。(以後，彼女の言葉を‘　’，「　」，筆者の言葉を〈　〉で表記する。)

制作者はオーストラリア生まれの18歳の女性である。専攻については'unsure'と記入したが，後に質問すると，スポーツに関する心理学(社会的文化的な文脈でのスポーツ)に興味があるとの事だった。家族は，アイルランド出身の両親と，兄1人，姉2人，双子の兄弟1人の5人兄弟である。教師である母親の事を 'head of family' と記し，農業を営む父親は 'absent' 健康も 'falling' との事だった。現在は兄，姉と共に生活している。これまでの人生においての印象的な出来事として述べられたことは，まず，スポーツが非常に得意であり，12歳の時にソフトボールのステートチームに入った事(現在はフットボールチームに所属しており，これも高レベルであるとのこと)，そして，足の手術をした事，国内，海外への旅行が挙げられた。その後，'most important one' として，3,4才時に船から落ち，おぼれそうになった事が記されていた。怪我や事故に対しても 'great'，'exciting' と語って，あまり動揺した様子を見せず，前向きなところが印象に残った。

本実験への動機については，単位が比較的早くにまとめてとれることに加えて，'it sounded tremendously fun' と，箱庭に対して興味がわいたことも述べている。

また，バウム・テストも行った。バウムは，横向きにされた画用紙の左側中央に非常に小さく書かれており，ふわふわとした樹冠の中に，開放枝に近い形の一線枝があり，熟した実が一つ，根元に落ちているのが印象的であった。

彼女は体格がよく，また大概スポーツのユニフォームを着ていて，中性的であり，フットボールでフォワードに入って活躍しているのがぴったり来るような印象である。また，他の学生と比較すると相対的にあまり表情が動かず，多くを語るタイプではない寡黙な人のように見うけられたが，記入用紙の方では，比較的自分についてよく語っており，自分語りへの動機も感じられた。

3．箱庭制作の過程

第1回

上記の様な入り口の作業を行っている間にも，彼女は，箱庭の用具に興味を示し，砂に触ってみたりと，すぐにでも制作をはじめたい様子であったので，質問を簡単に済ませ，早速箱庭を制作しはじめることとした。

まず，棚をゆっくりと見渡して，「どれからしようか」といいつつ兵士や戦車を見つけたようであった。それらをまとめて砂の上にどさっと置き，一人一人の兵士を見て分類していく。

'Can I move the sand?' と聞き，砂で，丘のようなものを作っていく。さらさらとした砂を支えるために，内側に柵を入れて芯として使う。砂を大雑把に寄せては陣地の防護壁のようにして，その後ろから敵を打ち合う2軍を作っていく。

ところが，ふっと気分が変わったかのように，'Can I make two pictures in one?' と，戦場を脇に寄せてその横に雪山を作り，そこにスノーボーダーを滑らせる。と，また，'Can I make a new one?' と全部片付けて次の物に取り掛かる。もどかしそうに玩具をしまおうとする姿に〈その辺に置いといていいよ〉と声をかけると，以後は床の上に玩具を置いては次のものに取り掛かる。次には，箱の左下隅に線路が出来，脱線した列車が現れる。と，箱の対面に，位置を確かめるように覗きこまれながら病院が置かれ，列車の近くには救急車が止まる。列車の脇には怪我をして倒れている男の子が横たわっており，また，枠の上から，悲しそうな顔の男の子がそれを心配そうに見守っている。病院は，大切そうに柵で囲まれ，また，白バイも事故現場に到着する。その後，事故現場と病院との間をつなぐように，さっと指で道が描かれ，車が縦横に走っている様子や，飛行場が作られる。大体間が埋まったというところで，再び，あっさりと玩具はすべてとり去られる。

次に作られたのは，'park, sort of' とのことで，何本か，大きな木が植えられ，池が作られた公園の中に大人や子ども，楽器を吹く人や小人たちなどが，それぞれ自分の時間を過ごしているような作品である。これは，割合ゆっくりと作られたが，大体出来あがったというときに，再び，取り壊されてしまう。次の探索が始まった時点で筆者から時間を告げて，制作を終了。少し，作品について質問するが，あまり，語りたがらなかった。2番目の作品については，前の週にヨーロッパで起きた列車の事故の様子を作ったのだとのことだった。

筆者にとっては，彼女の世界が展開されはじめ，そこにコミットしようとすると，すっとそこに蓋をされて，代りに他のものが出てくるように感じられた。落ち着いて一つのところにいられない感じがし，少し混乱するように思いながら彼女を見守った。

彼女が最初に作ろうとしたのは戦場であり，また列車事故の現場である。非常に攻撃的で，残酷な場面が表現されようとしており，彼女は，彼女の中にある戦いを表現したいのだが，一方でそこにじっくりと取り組めないところや，戸惑いも感じているのではないかと思われた。事故現場に繋がる病院は大事に柵をされて守られており，また，その現場を見守る存在も置かれたことは，彼女の中にある守りを感じさせた。また，最後にのどかな公園を作れたのは，急に現れた彼女の中の攻撃的な部分を補償し，また彼女自身の戸惑いを収める意味もあったのではないかと思われる。

一週間後，第2回目を設定するが，彼女は現れず，筆者が電話をすると，忙しすぎて忘れてたのだ，と，あまり悪びれることなく言う。再度，その次の週に約束をする。面接の予約をすっかり忘れてしまう，ということは木村(1986)も述べているように，時に心理療法の過程において起こるが，彼女にとっては，非常に日常とは異なる経験をしたあとで，それを消化するの

に1週間では足らなかったのではないかと考えられた。また，一回の面接において1つの作品を作るペースが一般的だと考えられるが，彼女は，3つの作品を1時間のうちに作っており，より一層その体験を心に定着させるのに時間を要したのではないかと思われる。

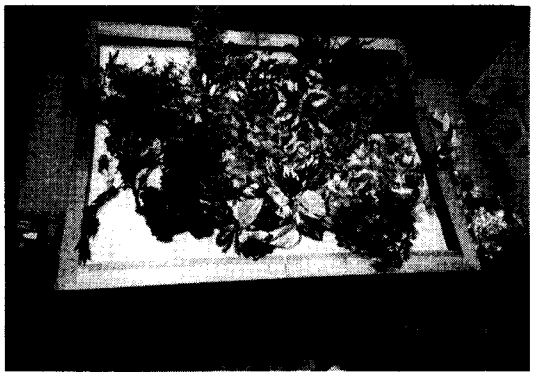
第2回

少し筆者と世間話をしたあとに早速箱庭を作り始める。長い間棚を見つめて，なにか探しているかのようだったが，ゆっくりと砂を均し，右半分を大きな海となるよう砂を寄せ，ビー玉をちりばめ，2艘の船を浮かべる。そこに浜辺で寝転がる人や動物たち，家を並べて海辺の風景が出来あがる。穏やかな印象。家の部分を並べ替えて街らしく工夫している。と，また急に片付けはじめ，地ならしをし，家を残して街を作り始める。きちんと区画された街で，指で道を描いて，そこに標識なども加えられる。町に住む人を置いている最中に転んでいる人が現れ，そこに怪獣 'gozilla' が現れてくる。それに対して，戦車，兵隊が応戦，緊張感が高まる。筆者は，街はどうなるのだろう，と思って見ているが，その場面はすぐに片付けられてしまう。

更地になった箱庭には，慎重に選ばれてきた枯れ木が植えられ，その後，うっそうとしたジャングルのように緑の木々が生い茂る。ジャングルを抜けた右端には怒った天狗の顔が枠の上に現れ，その前にはおじぞうさん，その脇をインド神が固める。なにか神聖な場所のような雰囲気。森の中にはカエル，蛇，イグアナ等の怖いような動物が潜んでおり，木の枝には骸骨がぶら下がっている。木の上にはサルたちもいる。(彼女によるとサルは，ジャングルに警告 'warning' を発している。) 左側の森の入り口にティンティン(旅行をする漫画の主人公の少年)とその仲間である犬・ゾウや少年たち，お付きの使者のような服装の人が現れて，まさに森に入っていこうとしているようである。森の中には昆虫などが置かれ，さらに危険な雰囲気になった。また，天狗・おじぞうさんの周りは，いったんすべて取り去られ，慎重に石畳で固めていかれる。その石畳に続く参道に，ティンティンたちが向かっている。おじぞうさんの前には，深い青色のビー玉がつぼの上に載せて飾られ，とても大事なもののように守られ，置かれている。このビー玉を守るため，矢が，木の上から吊り下げられる。これは，'baby trap' で，宝であるビー玉をとろうとすると矢が落ちてくる仕掛けになっているのだとのことだった。このあと，ゴリラを森の裏手に2匹ほど置く。このゴリラたちは，とてもくつろいだ様子であった。

ここで彼女は，'that's about it' と，すっきりした様子で筆者に告げる。(写真1)。なにか言いたげに，筆者の反応を待っているようだったので，<なにかこれは物語がある?>と尋ねると，その後，かなりゆっくりと，箱庭について説明をしてくれる。今まで，黙々と箱庭に取り組んでは，作品が大体出来あがったところで片付けてしまうことを繰り返していた彼女が，ぽつぽつとではあるが，作った箱庭についてじっと見ながら語る姿から，相当この作品は彼女にとって大切なものなのだ，ということが伝わったような気がし，残しておきたい気持ちも味わった。この作品は唯一彼女が部屋に自分から残していった作品でもあった。彼女によるとこれは，

「一種のインディアン・ジョーンズのような冒険物語で，ティンティンたちは(ビー玉である)秘宝を求めて旅をしている。道は一つしかなく，その道中には恐ろしいものや動物が潜んでおり，また，宝を守るものとして，神々が周りを囲んでいる」とのことだった。筆者と彼女は，じっと作品を眺めながら，時折話をして余韻を味わい，終了の時間までを過ごす。



第3回

入室するなり，早速箱庭に取り掛かる。まずは，森の中の家から，7人の小人たちが出かけていき，それを白雪姫らしき女性が見送っている様子が表される。小人たちの向かう先は遠くのお城で，その道中には，石で作られたごつごつとした山がそびえている。ここまでは，ストーリーのある感じだが，空白が多いことを気にしてか，色々と考えた末に，緑の木々を，箱庭全体に散らしてバランスをとる。これで全体に豊かな様子になると，さっと片付けてしまう。

次には箱庭全部に緑のシートを敷き詰めて，牧場を作り始める。シートは2色に分かれているが，その境にさらに柵を置いて，牧場のエリアと森の狐とそれを負う狩人がいるエリアへと分ける。農夫を置いて，きれいな景色が出来あがっていく。筆者は，カチッと決めすぎて遊びがなくなってくるような印象を抱きながら見ていると，これも片付けられていく。

次には，真ん中に一本，線路をつないだ道が通され，そのまわりに前週のジャングルに似たような森が作られていく。この森にも，お化けや怪獣，爬虫類やゴキブリといった気味の悪いものがたくさん潜んでいる。ここまでつくって，また片付けられる。

次には，柵を使って動物園のようなものが作られていく。キリンが木から葉を食べている。そして池ではカバやゾウが水浴びをしている。猛獣であるライオンやゴリラも，柵のあまりないところで自由な感じに生活している様子である。と，左上のコーナーに小さく柵で区切ったスペースが現れ，そこには雌雄のトラが3匹入れられる。トラの檻の前には人だかりが出来，一番後ろで，傘をさした悲しそうな顔の男の子が見ている。彼女は，人を動物たちから柵で区切ると，何かいらついているような表情で，すべて片付けてしまう。

いつもと違って棚の中まで玩具を戻そうとするため筆者が声をかけて，話を聞く。何か放心・混乱したような表情をしている。最後の作品が気に入らなかった，と落ち着かないような悲

しそうな様子であり，このまま別れるのが心配な感じであったが，＜来週待ってる＞と別れる。

第4回

最初にピアノが置かれ，室内の風景が現れる。冷蔵庫やお酒の壜が並び，飲み屋のよう。音楽を奏でるバンドもいて，客はそれぞれに楽しんでいるよう。少し離れた右上の隅にトイレが置かれ，そこで吐いている少年がいる。少年が置かれると，そのシーンは終わったようで，さっと片付けて，長い間棚を探索する。

次には，海草で真ん中に道のようなものが作られた後に，ビー玉と青いガラスの石をちりばめるように使って作られた，海の底の様子である。丁寧に，魚やヒトデを置いていき，少し考えた後に枠の上に船を浮かべるようにおく。そして再びそっけない感じで片付けに入っていく。

あまりのペースの速さに，筆者は落ち着かない感じを覚えて，声をかけ，＜ずっと作りつづけてるようだけど，休憩してもいいんだよ＞という。それにはうなづくが，彼女は，さらに作りつづける。次には，インディアンとカウボーイが石で作られたそれぞれの陣地である防護壁に守られつつ戦闘しているシーンが作られる。その背後には，西部劇に出てきそうな家並みの前で戦闘を見守っている人々が置かれ，また十字架が家の前に置かれ教会が作られる。その後，戦いのシーンもさっと取り除かれる。

次に，彼女は着物を着た日本人形を箱庭へと持ってきて，一人一人をよく観察していく。陶器のテーブルセットと料理などを用意し，日本庭園を造っていく。丁寧に小石を円形に固め，また，それとは反対の右側に池を作ろうとする。ふと思い立ったように，砂を寄せて右上の隅から流れる滝を作り，そこに続く池に橋を架ける。その橋の上ですれ違って挨拶をしている人，池の脇で魚を眺めている人，そして，小石で作った台の上に立てられたおじぞうさんをお参りしている人々が現れる。緑の木々を背景にし，おじぞうさんと池が繋がるように，ゆったりと曲線を描く，小石でできた散歩道が出来ていく。彼女の手つきは，箱庭をつくりはじめた第1回目にくらべて非常に繊細になっており，とてもゆっくりと石を選んで，ゆったりと並べて道をつくっていく。空いたスペースの砂を均して，そこには砂に渦模様が描かれていく。最後に

ゆったりと箱庭全体を眺め，木陰に灯篭を配する。とてもリラックスする雰囲気で，彼女自身もとてもこの作品に愛着を持っているのが手つきからも窺われた。

もう一つ作品を作ろうとするが，時間が来ていたために中断。'I forgot the time.' とつぶやいているのが印象的だった。

第5回目については，彼女に問うと，もう制作はしなくていい，と言ったため，これまでの振り返りを一緒に行った。

箱庭について彼女は，「かなりおもしろかった。色んな玩具を組み合わせて新しいものを作っていくことは楽しかった」と述べた。「作っている途中に違う考えがわいてきて，今作っているのを急いで終わらせて次のを作る事があった。あんまり急いで作ったので，何を作ったのか，覚えてないくらい。」「日本庭園の作品は，作りながら考えがわいてきたので非常に楽しかった。」「大体，最初はその週にあったことからの連想で作っているのだが，そのうち違うことを思いついてはじめる」というところから，普段から，引越しが多い等，動き回る事が多く，また，感情も常に変動しているのだ，ということが語られた。箱庭の中で表現することも，次第には快適なものから平和なものに変わっていき，それは自分の気分の変化にも基づいているように思う。と，箱庭と自分を関連付けていた。

Ⅲ．考　察

1．制作者の作った箱庭作品

彼女は1回のセッション毎に3～4，合計14の箱庭作品を制作した。ここでは，箱庭作品を通して彼女が表現したものについて考察したい。

第1回目においては，待ちかまえたかの様に兵士を取り出し，戦わせる等，かなり攻撃的なシーンが最初から表現された。次の列車事故に関しても，悲惨な状況が連想されやすい場面である。一方で，彼女は，攻撃的で悲惨なコンセプトを表現した後，とても素早く次の作品に移行していた。また，「第二次世界大戦」や，「ヨーロッパ」の事故であると簡潔に説明するところからは，どこか，彼女の中に生じてくる攻撃的なイメージとじっくりとつき合えないところや，戸惑いを感じているのかと思わせた。事故現場につながっている病院は，大切に柵で囲んで守られており，また，現場を見守る存在があることは，彼女の中にある守りを感じさせた。最後に，のどかな公園が表現されたのは，急速に生じてきた激しいイメージを補償して，戸惑いを収める意味にも感じられた。

第2回目では，海と海辺の町から，次第に市街地へと連想が移っていく。そこに，また再び 'gozilla' が平和を乱し，戦う人間が現れる。街から，さらに奥地へと連想は広がり，深い森の中にある深い青色の宝玉とそれを守るように囲む神々が現れてくる。この箱庭（写真1）において，主人公だと思われる少年は，未知の森へと足を踏み込んでいく。この森には，多くの危険が潜んでおり，それによって外部のものからの侵入を防ぐ守りを兼ね備えているとも考えら

れる。鬱蒼と茂って中身を容易に知らせない森は，彼女自身にとっての異界，無意識に属する部分の現れと言えるのではないだろうか。宝玉は，未知のものではあるが，彼女にとって非常に大切なものが心の奥地には潜んでいるのだ，ということを表しているかのようである。また，宝玉を手に入れることは，罠によって命を落とす危険を冒すまでに，命がけの作業である事も語られている。実際，彼女は，箱庭を制作しつつ，いかに困難な道のりであり，いかに神聖な祭壇が設けられているのかをじっと考え込んでは，表現しようとしていた様に思われる。

第3回目には，2回目で表された森に続くように森の中から，七人の小人が出かけていく。その後の牧場では，芝生が地面全体に敷き詰められたため，息詰まる様な雰囲気であった。次に作られた森は，二回目に作られたものに非常によく似ている森の中に，線路によって道筋が示されている。これらは，何がテーマとなって作られているのかははっきりしているのにも関わらず，きちんと作ろうとするあまりに伝わるものは記号的になってしまう様な作品だと感じられた。最後の「動物園」については，思い通りにいかず，彼女は落ち着きを無くし悲しそうだった。

全体的に，この回の彼女の作品は，美しく，バランスは取れているが，表面的に流れていく印象を持った。第2回目の最後に作ったもののインパクトとの比較によるのかも知れない。また，二回目にあまりにコントロールを越えて表現をしたために，それをカバーしようと試みているのかとも思われた。「動物園」は，当初，動物が自由に生活している様子であったが，最後に，トラという肉食の動物のみがきっちりと区切られ，そこから人間と，動物との境界がはっきりとつけられていく。これには，筆者は，これまでに表現されてきたような攻撃性や無意識的なものと彼女の自我の共存のしにくさ，境界の付けがたさを連想し，そこが「上手くいかなかった」のではないか，と考える。

第四回目には，室内・海の底など，より内部，深層を思わせる表現が続き，その後，再び戦いのテーマが現れる。最後に作った「日本庭園」であるが，第三回目に作った作品のバランスの良さとは，また異なる調和を持った風景に落ち着いている様に感じられた。彼女自身の発想で，滝，食べ物，人々の和と宗教（お地蔵さん）が自然に取り入れられている。このような形で，彼女は，自然と宗教と人の折り合いを表現できたのではないかと考えている。また，第二回のジャングルも，この日本庭園も，神は西洋神でなく，東洋神である。これは，見守り手との呼応もあり得ようが，さらに，オリジナルな宗教的心性を表現するとき，日常的に接する神ではない，異界からの神として東洋の神が用いられたのではないかと考える。

2．制作者の体験した箱庭制作過程

彼女の箱庭制作の過程において，まず，筆者にとって印象的だったのは，作品が一つ作られては，次のものへと，次々に移り変わっていくことであった。1回のセッションで1～2つの箱庭作品が作られるペースが通常で，また，実際の治療場面では，それが毎週作られるとは限

らない。そういう意味あいにおいては，彼女は，1回に3,4回分の体験をしたとも考えられる。また，彼女も述べているように，これは，一つのイメージに取り組んでいる間に，他のイメージが頭の中に浮かんでくるために，一つ一つのイメージにはゆっくりと付き合わずに常に動き続ける，という彼女の特徴を反映した結果だったのかもしれない。彼女が制作した作品の中には，様々な位相のものが混じりあっているように思われるので，以下その位相について考察してみたい。

最初に彼女が作った「戦い」の場面では，彼女は戦いから連想するものを視覚的に表現してみた，という位相に留まり，自分なりにその戦いを味わったり，工夫してより戦いらしく表現する前に，次の表現へとイメージが移行している。砂のさわり方も，非常に大雑把で，適当であり，作品への愛着はさほど感じられなかった。これは，言葉やイメージをひとまず口に出し，表現してみて，自らの外に置く事によってまた，次の言葉，連想が生まれ，繋がっていく状態とよく似ているように思われる。即ち，彼女にとっては，移り変わる一つ一つの箱庭作品が言葉にあたり，それを視覚的に確認し，構成する作業の中で次のイメージが湧いていたのではないかと考えられるのである。

また，当初，彼女の作品は，最初に設定されたテーマがはっきりしているがために彼女自身の独創性が織り込まれにくく，作品中では発展しがたい所もあったようである。連想するテーマの時点では，彼女の独創的な必然性から生じて来ていたものが，そこから変更や工夫を加え，作品構成の中で自己確認や連想を行うというような関わり方にはなりにくい所があった。立ち会う筆者としては，これから世界が展開するか，というところでもう一度白紙に戻ってしまうようなもどかしさや，作品をゆっくり味わえないような落ち着きなさを感じることも多々あった。しかし，ここでより重要であったのは，テーマの提示と，そこから拡がる連想の流れであったように思う。そこでは，言葉にして確認したり，ゆっくりと出来た作品を見て鑑賞することではなく，作品と作品が流れを持って繋がっていくという表現がなされていたのではないか。

第2回の「ジャングル」では，彼女は自ら制作の手を休めて箱庭について語りはじめる。テーマも，作っていく内に思いついては流動していき，最終的に出来上がったという感触を得た作品である。他の作品と比較して，この作品では，テーマからテーマ，また作品から作品といった連想が動いているのではなく，より部分から部分へと物語のディテールが紡がれた。これは，4回目の「日本庭園」にも共通している。ディテールに工夫を凝らす中で，彼女にしか表せないような庭園が出来ていった。砂との関わりに関しても非常に繊細さや作品への愛着が感じられた。この2つの作品は彼女にとっても筆者にとっても印象的なものであったが，非常に落ち着いて制作に関わっているのが感じられた。このような箱庭制作過程において，彼女が箱庭作品について語ろうとしたのはどういうことであろうか。最終的に出来上がった作品は，彼女が最初に設定したテーマから発展し，把握しきれないような部分もあった。筆者に説明をしたり，じっと作品を見つめて，余韻を味わう中で，作品を定着させるための作業が行われたのではな

いか。

3．箱庭作品と箱庭制作過程

2.では，2つの制作過程の位相を示したが，その位相によって，作品の果たす役割や，作品に対する言葉の役割は異なるということが，彼女の箱庭制作過程を検討する中で理解された。箱庭を制作する過程は，玩具を選んでは，それを，定められた空間の中に定位していく事の繰り返しである。作品によっては，その玩具や，テーマの選択に表現の焦点があり，そこから作品同士の繋がりに過程としての独創性が示され得よう。また，他の場合には，定位された玩具同士の配置から，さらに新しい連想が生じていき，その連想に付き従っていく中で，何か新たな作品としての構成の独創性が示されることとなるのではないだろうか。さらに，これまで示してきた位相は単純に二分されるものでもなく，お互いの位相が入れ替わるように少しずつ混じりあって展開するということも経過を追う中で感じられたことである。

箱庭療法において，本来，作品と制作過程は絡み合って展開するものであるが，作品のテーマを追うのみでなく，どの様な制作過程からその作品が生じて来たのかを検討することで，制作者の心の動きにより近づくことが可能なのではないかと考える。今後，より多くの事例から，具体的に箱庭作品とその制作過程の関係を検討していくことが必要であろう。

Ⅳ．引用文献

青木　健次(1986)箱庭技法の治療的作用と治療者の役割　京都大学学生懇話室紀要　15，p1－22

岡田　康伸他（1988）オーストラリアにおける箱庭表現に関する研究　箱庭療法学研究　1巻1号，p17－26

岡田　康伸(1991)　箱庭表現の諸相　国立民族学博物館研究報告別冊　15号，p379－404

木村　晴子(1985)　箱庭療法－基礎的研究と実践－創元社

櫻井　素子（1988）オーストラリアのある重度言語障害児学校における箱庭療法の試み－砂遊びが大好きな8歳男児の箱庭療法－　箱庭療法学研究　7巻1号，p36－40

野副　紫をん（1997）箱庭療法過程の見方に関する研究　箱庭療法学研究　10巻2号　p27－37